

コネティカット大学工学部

1998年6月1日から10か月間、文部省在外研究員としてアメリカ・コネティカット大学のBahram Javidi教授の研究グループの一員として研究生活を送る機会を得ました。Javidi教授の研究グループについては第28巻第5号での場さんが詳しく述べられていますので、光の分野の話ではなくなりますが、私は工学部（School of Engineering）の様子について述べることにします。工学部は、Chemical Engineering, Civil & Environmental Engineering, Computer Science & Engineering, Electrical & Systems Engineering, Mechanical Engineering と Metallurgy & Materials Science の6つの学科から構成されています。建物はニューイングランド地方らしくレンガ造りの伝統的な趣のある外観ですが、中に入ると最新の設備が整っていて外観とのギャップが印象的でした。

滞在中、工学部の全スタッフが一堂に会する new faculty reception & awards presentation というパーティーに参加する機会を得ました。的場さんや私も new faculty として招かれたというわけです。日本のように1枚の紙にコピーされた味気ない案内状が来るのではなく、カラーで印刷された招待状が送られてきたことにまず驚きました。やはりアメリカ、招待状にはご家族同伴でお越しくささいと書いてありました。パーティーに参加してみると本当にほとんどの方が家族連れで参加されていました。中には正装した高校生ぐらいの男の子もいました。パーティーといっても形式張った固苦しいものではありません。これといった開会の挨拶もなく、参加者が自由気ままにオードブルをつまみ、ドリンクを飲み、生バンドが演奏し、あちこちで会話に花が咲くというとても和やかなものです。子供たちも物おじせず自分たちの居場所を見つけて楽しんでいきます。余談ですが、このパーティーに限らず、大人が主体となるようなパーティーでも子供たちがマナーを守って、自ら楽しんでいる姿に驚きました。このようなパーティに出席するからには、周りからは一人前とみなされ、子供だから少しぐらい騒いでもしかたがないなどという甘えは許されないようです。

しばらくして、新スタッフ紹介や授賞式が始まりました。このときばかりは少し場内の空気が張り詰めたよう

です。先ほどの男の子がきちんとした格好をしているのには理由がありました。彼の父親が賞をもらったのです。親子で満面の笑みを浮かべて固い握手を交わしていました。家族や同僚の前で表彰され記念品と金一封（小切手）が贈呈されるわけですから、これからも一生懸命がんばるぞという気にならないはずがありません。賞も学部が表彰するもの、学科が表彰するもの、研究が対象のもの、教育が対象のもの、と豊富です。日本の大学では私の知るかぎり教育を対象に褒められることはない（口頭で非公式に褒められることはあるかもしれませんが）と思います。

アメリカの大学の教授はお金を集めるのも（が？）重要な仕事だと聞いてはいたのですが、実際に目の当たりにする機会がありました。研究費を外部から調達するために（私が思うに映画「コンタクト」でジョディ・フォスター演じるアロウェイ博士がしていたような）プレゼンテーションが必要で、それに加かなり力を入れていることがわかりました。プレゼンテーションの日が近づくと、院生も研究そっちのけで、データの整理、見栄えのいいOHP作りなど準備に大忙しです。当の教授もストーリーを考えては私たちにもアドバイスを求めます。そして、何度も何度も練習を積み、プレゼンテーションに備えます。その姿はまるで初めて学会発表をする学部生のようなようでした。練習の成果もあって、プレゼンテーションは成功だったようです。ただ、あまり研究費が潤沢な研究室は逆にアクティビティーが低くなることもあるというのが、ニュージーランドからポスドクとして来ているスティーブ君の意見です。研究費をもらうためにはある程度の成果がないといけないので一生懸命研究するが、一旦研究費を手に入れるとそこそこの研究に落ち着いてしまいがちだと言うのです。果たしてこの真偽のほどはいかかなものでしょうか。またまた余談ですが、彼の話によるとニュージーランドやオーストラリアで開催される光関係の国際会議にはドイツ、フランス等ヨーロッパやアメリカからの参加者は多いのに、日本からの参加者は少ないそうです。もっと参加してほしいとのことでした。皆さんも機会があれば南半球の国際会議にも目を向けられてはいかがでしょうか。

（和歌山大学・野村孝徳）